慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国四川省涼山における彝族の複言語教育
Sub Title	About language education of ethnic Yi in Liangshan autonomous prefecture of China
Author	吉川, 龍生(Yoshikawa, Tatsuo) 山下, 一夫(Yamashita, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.11, (2014.) ,p.117- 135
JaLC DOI	
Abstract	The ethnic Yi is the seventh largest ethnic minority group officially recognized by the Chinese Government. The ethnic Yi has its own language named Loloish, but the official language in China is Mandarin which is spoken by the majority Han. In order to keep its own language and at the same time to master Mandarin, it is decided the language education in Liangshan Yi Autonomous Prefecture would be conducted as the following two ways: one is that all the lessons must be taught in Yi language, but Mandarin is taught only as a language lesson, and the National College Entrance Examination can also be taken by Yi language. The other one is that all the lessons and the National College Entrance Examination can be conducted in Mandarin, and Yi language is taught only as a language lesson. The young Yi elites usually will be sent to Southwest University for Nationalities (SWUN) to have a higher education after they graduate from high school.
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20140000-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国四川省涼山における彝族の複言語教育

吉　川　龍　生
山　下　一　夫

The ethnic Yi is the seventh largest ethnic minority group officially recognized by the Chinese Government. The ethnic Yi has its own language named Loloish, but the official language in China is Mandarin which is spoken by the majority Han. In order to keep its own language and at the same time to master Mandarin, it is decided the language education in Liangshan Yi Autonomous Prefecture would be conducted as the following two ways: one is that all the lessons must be taught in Yi language, but Mandarin is taught only as a language lesson, and the National College Entrance Examination can also be taken by Yi language. The other one is that all the lessons and the National College Entrance Examination can be conducted in Mandarin, and Yi language is taught only as a language lesson. The young Yi elites usually will be sent to Southwest University for Nationalities (SWUN) to have a higher education after they graduate from high school.

１．はじめに

中国の西南部に「彝族」（いぞく）と呼ばれる少数民族がいる。四川省、雲南省、貴州省の三省に跨がって分布し、2000年に実施された中国の国勢調査では総人口7,762,272人を数える[i]。これは中国政府が公式に存在を認める56の民族の中では８番目に多く、ヨーロッパであればスイス一国の人口に匹敵する。民族固有の言語は「彝語」（いご）と呼ばれ、シナ・チベット語族に属し、リス族のリス語、ジーヌオ族のジーヌオ語、ハニ族のハニ語、ラフ族のラフ語、ナシ族のナシ語などとともに、チベット・ビルマ語派彝語支を構成する[ii]。

一方、中国で最大多数を占める民族は漢族で、かれらは漢語と呼ばれる言語を用いている。これは幾つかの方言に分かれるが、そのうち「北京語音を標準音とし、北方話を基礎方言とし、典型的な現代白話文の著作を文法規範とする」と定義される[iii]、半ば人工的に作られた「普通話」（Pǔtōnghuà）が国家の公用語となっている。日本でふつう中国語と言った場合にはこれを指し、漢族も、その他の少数民族も、自らの母語を用いる権利が保証されている一方で、公

の場では普通話を用いるものとされている。

しかし、実際には中国国内では漢族中心主義が幅をきかせてしまっている上、近代科学の用語の問題や実利的側面、また教育時間の制約や教員養成上の欠点などのために、少数民族の教育の現場においては普通話が中心となってしまうことも多い。また逆に、民族言語にばかり力点を置きすぎると今度は普通話教育がおろそかになり、国家の共通語を習得することが難しくなってしまう。中国の少数民族の言語教育が抱えるこうした問題は、また本邦における外国語教育が直面する様々なテーマとも直接関わるものともいえる。

そうした中で、四川省涼山彝族自治州では近年特色ある複言語教育を推し進めて成果を挙げ、中国国内で大きな注目を浴びている。そこで2014年の３月と８月の二回にわたって現地に視察に赴き、関係者へのインタビューや授業見学などを行い、その実情について調査を進めた。具体的日程は以下の通りである。

第一回　吉川
３月３日～５日　西南民族大学を訪問
３月６日　成都市第三中学を訪問

第二回　吉川・山下
８月３日　涼山彝族奴隷社会博物館、四川省涼山彝文教材編訳室を訪問
８月４日　普格県五道箐郷小学校、普格県民族中学校を訪問
８月５日　西昌市内にて螺髻山小中一貫校彝語担当教員、同漢語担当教員、西昌民族中学英語担当教員、西昌学院数学担当教員にインタビュー
８月６日　語言文字工作委員の阿余鉄日氏を訪問

本稿では、以上の現地調査にもとづいて彝族の複言語教育の状況を報告するとともに、その背景をなす社会状況や課題について検討してみたい。

２．涼山彝族自治州の言語教育政策

涼山彝族自治州が独自の複言語教育を打ち出したのには、幾つかの理由が考えられる。先に述べた通り、彝族は四川省、雲南省、貴州省の三省に跨がっているが、中でも四川省の涼山彝族自治州は彝族の大規模なコミュニティがあることで知られている。「彝族自治州」と言ってもすべての居民が彝族であるわけではなく、平野部では漢族も多く居住しており、特に州都の西昌市は政府の宇宙ロケット打ち上げ施設があることも関係し、漢族が人口の多数を占めている。また木里チベット族自治県にはチベット族が多く居住しているほか、モンゴル族や回族も

分布する。彝族はどちらかというと山間部を中心に居住しているが、それでも州の総人口約470万のうち過半数の260万を占めており、主要民族であることには間違いない。こうした状況が州をして彝族の民族教育に力を注がせることとなったのと同時に、漢族が一定数存在することで漢語教育にも目配せをしなければならない環境にある。

またそうした政策を実現しようとする彝族のローカルエリートの存在も重要である。かれらを生み出したのは、皮肉なことに一般には中国現代史の動乱期として記憶されている文化大革命（1966年―1976年）であった。それまで涼山彝族自治州は決して教育水準が高いとは言えない状況にあったが、そこに文化大革命によって都市部から漢族の知識分子が大量に下放されてきて、現地で教員として彝族の教育にあたり、かれらを養成したのである。文化大革命の終結とともに漢族知識人たちはもとの場所に帰っていったが、この時に知的水準を高めた世代が現在の複言語教育の旗振り役となったのだ。

かれらは現在、経済的・文化的状況が決して良好とは言えない自治州の底上げを図ることを目指している。一般大衆の知的水準を上げることにも当然大きな関心を持ってはいるが、より重視しているのは次世代エリートの養成である。これは、文革期に自分たちが受けた教育を次の世代にバトンタッチしようというかれらなりの信念に基づき、地方のホワイトカラー層に漢語と彝語の両方に通じた人材を送り出すことで行政の安定を図るとともに、彝族という民族が埋没しないように漢語を使って自民族の文化を中央に発信できる知的エリートの育成を目指している。かれらがこうした方向性を実現するために、最も重要なツールとなる言語の教育の充実に向かったのは、ある意味で当然のことであった。

さらに言えばそうした政策の背景を成す、彝族が持つ漢族との独特の距離感の存在も重要である。涼山彝族自治州の彝族は清代以来入植してきた漢族（当時は「族」概念は形成されていなかったが）と対立してきた過去を持ち[iv]、中華人民共和国成立後の1950年代にあっても自治州南部の一部の彝族が武装蜂起を行うなど、両者の間には一定の緊張した状態が続いてきた。また現在でも、例えば彝族の伝統文化を展示する公営の博物館に「涼山彝族奴隷社会博物館」などという無神経ともいえるネーミングを行う政府側の漢族に対し、彝族の知的エリート層は根強い不信感も有している。しかし、一方で彝族は紅軍が1934年に江西省瑞金を放棄して陝西省延安に向かったいわゆる「長征」に際し、現在の涼山彝族自治州の領内の行軍を支援し、またこれに協力したことで、建国後は「革命に功績のあった民族」として中国共産党中央に記憶されてもいる。そのため現在の政治体制の文脈では、例えばチベット族やウイグル族などとは異なり、少なくとも表面的には漢族との「友好」の度合いが高い民族となっている。こうした漢族との微妙な「間合い」が、自民族の言語と中央の言語の両方を重視しようという方向性として現れているものと思われる。

自治州の街中を歩くと、道路標識や店の看板などの文字表記がすべて彝語と漢語（漢字）で

併記されており、漢語側で非常に抽象的な組織名が使われているような場合でも、すべて彝語でも表現されていることに驚かされる。これは1980年から実行されており、自治州の言語政策の中では最も早く実を結んだ成果である。中心となっているのは涼山州語言文字工作委員会（語委）で、最初の２年間でまず街中の道路標識をすべて２言語表記に改め、次に商店の看板についても義務化し、違反者を取締の対象とした。漢族の場合は彝語への翻訳を語委に依頼する仕組みになっており、これによって用語の統一も行われている。中国の少数民族居住地域で、看板の２言語表記がここまで徹底されている場所は他に無い。

さて、こうした漢語と彝語の二言語使用を教育面で行っているのが、通称「両類模式」と呼ばれる制度である。以下、この制度について説明を加えたいと思う。

涼山彝族自治州の学校教育では、小学校から高校まで、どの民族であろうと必ず漢語と彝語の二言語を学習する。理屈の上では、漢族は漢語が母語、彝族は彝語が母語ということになるはずだが、実際にはそう単純な話ではない。まず問題になるのが漢語、すなわち本邦でいうところの中国語である。先にも述べた通り、漢語には公用語としての普通話と、各地で用いられている方言とがある。涼山彝族自治区で話されているのは四川方言で、これは普通話のベースとなっている北京語と同じ「官話」方言の１つである「西南官話」に属する。例えば、上海であれば現地で用いられているのは「呉語」に属する上海方言で、官話とは系統が異なっているため、当事者の間では「異なる言語」という意識が強く働く。しかし、四川方言の場合、例えば北京語の話者であれば慣れると何とか聞き取ることができるようなものとなるため、話者たち自身もこれを普通話とそれほど隔たったものではないと考える傾向にある。これに加えて、方言的な言い回しを故意に挟み込むようなことをしない限り漢字での表記は同様となるため、普通話のつもりで書かれた文章を四川方言で読むという、ヨーロッパの諸言語間ではあり得ないような操作も可能となる。実際四川省では、漢語で授業を行う場合、公的には普通話を用いることになっているのにもかかわらず、四川方言を使うケースは非常に多い。また一方で、外地からやってきた漢族の場合は当然のことながら出身地の方言を話すこともあり、さらに政府幹部や知識人の家庭で育った漢族の子どもは普通話に近い言葉を母語として操る傾向にある。「漢族が漢語を使う」と言っても、そこで言われている漢語の実体は様々なのである。

また彝族の方も、山間部の彝族居住地域は彝語を母語とする場合が多いが、都市や平野部の居民は漢語四川方言を用いていることが多い。母語は彝語だが漢族との接触が多いために日常的には四川方言を話すという場合もあるし、戸籍は彝族でももはや彝語の使用を放棄して生活様式全般が漢化してしまっている者もいる。また逆に、戸籍は漢族で母語も漢語だが、実は数世代遡ると彝族だったというケースもある。

このように漢語・彝語をめぐる状況は非常に複雑だが、実際面では (1) 言語生活は彝語が中心で、漢語はできないか、あるいはできても能力が低い場合と、(2) 言語生活は漢語が中心

で、彝語はできないか、あるいはできても能力が低い場合の２種類に大別できる。そこで (1) の学習者を想定して、基本的に授業は彝語で行い、プラスアルファとして漢語の学習も行う「Ⅰ類」と、(2) の学習者を想定して、基本的に授業は漢語で行い、プラスアルファとして彝語の学習も行う「Ⅱ類」の２つのコースが設定された。その上で、学習者および学校は、自らの状況に合わせてどちらかの履修あるいは設置を選択でき、また学習進度や興味に合わせて途中から類別の変更を行うことも可能とした。これが涼山彝族自治州の「両類模式」制度である[v]。

この制度が画期的であったのは、どちらか一方の言語に偏したコースのみを設置するのではなく、２種類の制度の併存を認めたことであろう。少数民族言語の使用地域は、中国国内にも、また世界の様々な国にも存在するが、２つの言語を平等に扱おうとすると時間的に難しいため、結局は民族イデオロギーの方が強い場合には少数言語を優先したⅠ類のようなものだけとなり、また民族学習をプラスアルファ程度に抑えなければならない場合には国家の共通語を優先したⅡ類のようなものだけになる傾向がある。どちらも一長一短であるが、涼山彝族自治州が思い切ってその両方を導入し、多様な少数民族言語学習者に向けて開放したことは、まさにコロンブスの卵というべき発想だったといえよう。

両類模式が設置されるのは、小学校の６年間、中学（初級中学）の３年間、高校（高級中学）の３年間の、合計12年間である。Ⅰ類については小中高の「語文」（本邦の「国語」に相当する、漢語の授業）を除くすべての科目について、またⅡ類については小中高の「彝文」（すなわち彝語の授業）について、いずれも彝語で書かれた教科書が必要となるが、その作成を一手に引き受けているのが西昌にある四川省涼山彝文教材編訳室である。

ここは、漢語で書かれた国定教科書を彝語に翻訳する作業を担当するとともに、自治州における彝語教育全体に関わっている。もともとは教育局の内部機関で、涼山彝族自治州ではなく四川省直轄の組織であるため、高い地位と権限も付与されている。中国の教科書は日本のような検定制度とは異なり国家主導で作成されたものしか採用されないが、四川省涼山彝文教材編訳室が翻訳した教科書が使用されているのは、組織の高い地位と権限とを踏まえてのことである。またそれは同時に、教科書に現れる近代科学の術語の彝語表記についても教材編訳室がコントロールしていることも意味している。どの国においても近代的な語彙の欠如は少数民族言語による教育の最大の問題であるが、彝語の場合はそれをこのシステムによって解決しているわけである。

さらに、小学校から高校までの彝語学習も、彝文教材編訳室が統一的に教科書を作成していることで、学習語彙や難易度が段階的に進むようになっている。日本の検定方式ももちろん長所はあるが、例えば英語教育について言えば、文科省の指導要領によっておおまなか学習内容は定められているものの、学校を転校した場合は、通った中学校と進学した高校とで異なる会社の教科書を採用している場合、どうしても両者の間では齟齬が生じてしまう。この点でも、

涼山彝族自治州の方式はシステマティックにできていると言えよう。

また、少数民族言語でもう一つ大きな問題となり得るのは標準語と正書法の制定である。彝語の場合も、６つの大方言と16の下位方言が存在している上、過去には地域によって様々な書写法が行われていた。彝文教材編訳室はこの問題を、1980年に国務院が批准した「彝文規範方案」を用いることで解決している。これは自治州北部の喜徳県の発音を「標準音」とし、四川省の伝統的な彝語表記を整理したもので、公教育がこのシステムを採用したということもあり、現在四川省で出ている彝語による出版物もすべてこの方式に則って行われている。

３． 涼山彝族自治州の言語教育

以下、各教育段階における両類模式の実際を見ていく。教育ということで言えば、最初の段階は幼稚園ということになり、彝文教材編訳室も重要性に気がついてはいるのだが、管理権限などの問題で把握できておらず、また我々も訪問をすることができなかった。聞くところによれば、西昌の都市部に開設されている幼稚園は富裕層の漢族を対象としており、識字ではなく文化面に重点をおいた教育を行っているらしい。ただ、彝族が多数を占める山間部地域は、経済的状況のために幼稚園自体がまだ多くないようである。

小学校は、Ｉ類では語文（漢語）の授業が週に６コマ行われる（なお小学校の１コマは40分である）。インタビューによれば、Ｉ類の学生はほとんどの場合漢語を話すことができない状態で入学してくるとのことで、かれらは小学校で漢語をいわば「外国語」のように勉強することになる。訪問先の小学校の教員にどのような教科書を用いているのか尋ねたところ、全国統一で用いられている人民教育出版社の『語文』だという答えが返ってきた。これは、基本的には漢族の小学生が日本で言う「国語」の授業を受けることを想定して作られた教科書だが、かれらはそれを言語学習のテキストとして用いていることになる。

漢語の学習は発音の習得から始まるが、まずは教科書の最初に書かれているローマ字による普通話の発音表記法である「ピンイン」を使って発音を練習するという。日本語のローマ字と違い、ピンインは表意文字である漢字の発音を表す、本邦におけるルビのような役割を担っており、『語文』の教科書でも小学校１年生の最初にこれを習う。ただこれは同時に、外国語として普通話（すなわち「中国語」）を学ぶ場合の発音習得でも用いられているので、外国人学習者と同様の使い方をしていることになる。

なお、日本の学生が「中国語」を学ぶ時、発音に慣れるのにかなりの労力を費やすが、それは彝族の学生も同様のようである。ただ、日本の学生は日本語に無い４つの声調やそり舌音、有気音・無気音の区別などに困難を覚える傾向にあるが、彝語は声調言語である上、有気音・無気音・そり舌音などがあるため、彝族の学生にとってこれらの発音は問題では無く、むしろ彝語に無い［-n］や［-ng］の鼻音尾が難しいようである。

ただ、発音はそれで何とかしたとしても、文法についてはかなりの問題がある。もちろん本邦の国語の授業で国文法を学ぶのと同様、中国の『語文』でも文法は勉強するのだが、それは畢竟非母語話者が言語を習得するためのものではない。この点は、担当教員が授業での使用言語を漢語にし、学生間でも漢語を用いて会話させることで身につけさせるのだという。いわば「習うより慣れろ」というスタイルで行う直接教授法ということになる。なおここで言う漢語は、公式には普通話であるはずだが、実際には四川方言になっているらしい。

次に、Ⅱ類は普段は漢語で授業を受け、それ以外に週に数コマ彝語を学ぶことになっている。取材した中では、小中一貫校である西昌市の螺髻山学校は彝語の授業を小学１年生から週4コマで運用しているということだったが、普格県の五道箐郷小学校は小学１、２年生は開講しておらず、小学３年生から週３コマの設置になっているなど、状況にばらつきがあった。学生も、Ⅱ類は漢族を念頭に置いているものと思っていたが、Ⅱ類のみを設置していた五道箐郷小学校は学生の100％が彝族であった。しかもこの学校に入学してくる彝族学生は、別に漢語が得意というわけではなく、むしろほとんどが入学時には漢語ができない。そのため１年生の担任には必ず彝族の教員を配置して彝語でサポートできる体制にし、また校内での使用言語も漢語とすることで（これもおそらくは普通話ではなく四川方言だが）、入学後数年で漢語を話せるようにするという。実際Ⅰ類とⅡ類では、後者を設置している小学校の方が圧倒的に多く、統計によれば、涼山彝族自治州で両類模式を採用している小学校のうち、Ⅰ類を設置しているのは17校に留まるのに対し、Ⅱ類を設置しているのは863校にものぼる[vi]。五道箐郷小学校は普格県の中では人気のある上位校として知られ、遠方からも学生がやってくるということだったが、そうした学校がⅡ類しか設置していないというのは意味深といえる。

彝語も漢語と同じく、初めはローマ字によって発音を勉強する。この時に用いるのは、1958年に公布された「涼山彝族拼音文字修訂方案」のシステムである。もともと彝語は中華人民共和国成立後、少数民族言語の中で最も早くローマ字表記法が作られた言語で、中央民族訪問団の陳士林が1951年に彝語のローマ字表記法である「新彝文」を発表し、続いて1956年には一部キリル文字を用いる「涼山彝族拼音方案」も制定されている。これは、伝統的に彝語表記に用いられてきたロロ文字が複雑で習得しづらいことと、ロロ文字は主に宗教職能者である「ピモ」によって伝えられたため、共産党によって「奴隷制社会の象徴」と見なされたことから、政府によって政策的に推進されたためである[vii]。「涼山彝族拼音方案」からキリル文字を取り除いたものが最終的に「涼山彝族拼音文字修訂方案」として施行されたが、一方で文革終了後にロロ文字が復権し、前述の「彝文規範方案」として整理されたため、ローマ字システムは初学の段階における発音練習のツールに成り下がってしまった。しかも現在のロロ文字は表音文字であるため、漢語のピンインのようなものは必要なく、教科書もロロ文字を学んだ後は全く登場しなくなる。しかも彝語ローマ字は声調を語尾の［-t］（高平調）、［-x］（次高調）、［-p］（低降調）

で表すなど、一般的なローマ字の決まりから外れているため、学生にとっては漢語のピンインや英語の綴りを覚える際の「混乱の元」にしかならないと、すこぶる評判が悪かった[viii]。

発音を終えた後は、ロロ文字で書かれた文章を読んでいくが、文法事項を積み上げて彝語を外国語のように学習するのではなく、『語文』の漢語学習同様の直接教授法が採られている。教科書が依拠する「彝文規範方案」は前述のとおり喜徳県の発音を標準音としているが、取材した普格県では南部次方言のアドゥ方言が話されているため、教員は学生の発音や綴りを矯正する必要があるということだったが、基本的には日本の国語の授業同様、識字から始まり文章を読みこなす能力を身につける場となっているようである。ただ、彝語ができない漢族の学生にとっては、何とか聞き取ることはできるようになっても、会話を習得することは非常に難しいらしい。発音矯正や会話練習をしようにも１クラスの人数が少なくて40人、多いと60人にのぼるというから、そもそも教員が一人一人の指導を行うことは不可能である。ただ漢族の学生にとって利点がないわけではなく、かれらは口語は駄目でも、ペーパーのテストは一般的に彝族の学生よりも高得点を取る傾向にあるらしい。

なお、チベット族や回族など、漢族でも彝族でもない学生が両類模式を設置している学校に入学してくることも稀にあるようである。ただ、涼山彝族自治区に居住するチベット族の場合は多くが彝語を解し、また回族は漢語を話すので、それぞれ彝族や漢族の学生と同じように扱われるということだった。

中学校も基本的な状況は小学校と変わらず、漢語教育も彝語教育も同様に直接教授法で進められる。統計資料によれば、Ⅰ類を設置している中学校は５校、Ⅱ類は80校ということで、やはり後者の方が数が多い[ix]。小学校よりも全体の数が減っているのは、中学校の設置数自体が少ないためだが、その結果小学校よりも１校あたりの収容人数が大きくなっており、１クラスは少なくて50人、多い場合には80人や90人もいるということだった。また、小学校よりも遠くなる学生も多く、父親が外地に出稼ぎに行っている家庭も少なくないということで、大多数が学校の寄宿舎に住んでいるとも聞かされた。なお、授業数は別にインタビューを行った教員の所属する螺髻山の中学部や訪問した普格県民族中学ではⅡ類が設置されていたが、そこでの彝語の授業は週に４コマであった。ちなみに、中学での１コマは45分である。

また英語は小学校から始まり、中学校になると本格化するが、彝族の小・中学校教員で英語ができる者がこれまでは少数だったため、英語だけはⅠ類模式の場合でも漢族の教員によって漢語で行われることが普通だという。漢語（普通話、四川方言とも）は有声子音（日本語で言う濁音）を持たないため、漢族が英語を学ぶ際は苦労するのだが、彝語にはあるし、またそもそも外国語は母語で直接勉強した方が効果も高いはずなので、この点は今後の彝族教員の養成によって改善されるべきであろう。

なお、西昌市内にある涼山州民族中学には日本語の課程もあるそうで、そこでは彝族の学生

が漢族学生よりも発音がよくできるという話も伺った。これは英語と同じ理由で日本語の濁音を習得しやすいということと、彝語の平板な声調が日本語の高低アクセントに似ていることも理由として挙げられるだろう。

中学卒業後、成績の良い学生は高校に進学することになる。進学しなかった場合、多くの彝族家庭で家業となっている農家を継ぐという学生は意外に少なく、職業専門学校に行くか、兵隊になるか、あるいは経済的に発展している沿海部などの外地に行って仕事をするという。

高校になると、英語の授業も直接教授法が取られ、教員は英語を使用言語として進める。両類模式については、基本的なあり方は中学と変わらないが、漢語の語文の授業が古典中国語の習得に進むのと同様、彝語も旧時のピモの経典など古彝文の読解を行うという。

なお高校については、涼山彝族自治州以外に、成都市内にある成都市第三中学（日本の中高一貫校に相当）も訪問した。ここは少数民族コースがあり、四川省内の各地からやってきた少数民族学生が全部で300人ほど在籍しているという。そのうち200人ほどはチベット族だが、さらに彝族・チャン族・ミャオ族・回族・満族などもおり、いずれも国家のアファーマティヴ・アクションによって学費が免除され、生活費も支給されている。インタビューからは、こうした措置について漢族から「逆差別ではないか」という不満を持たれている様子も感じられたが、少なくとも彝族について言えば、涼山彝族自治州から四川省の省都である成都の学校に進むことができるのは、ごく一握りの極めて優秀な学生に限られ、そうした批判は当たらないように思われる。なお、全体の三分の一が後述する西南民族大学に進学するということだった。

高校が小学校や中学校と異なるのは、大学受験という問題が見えてくることである。日本の大学入試は周知の通り、国公立や一部の私立はセンター試験と大学ごとの二次試験、また一部の私立は大学ごとの試験のみという制度になっているが、中国は大学ごとの入試問題は無く、全国統一で行われる「全国普通高等学校招生入学考試」、略称「高考（gāokǎo）」だけで判定される。これは、まず決められた数の複数の大学に前もって出願し、その後で志望校が指定する科目の高考を受けて、その点数の結果によって合否が決まるという制度である。中国の高校生にとっていわば人生のすべてがこれで決まるに等しく、あらゆる勉強がここに向かって収斂していくと言っても過言では無い。両類模式ももちろん高考と連係し、かつ補完する役目を持つ。

高考は国家の公用語である漢語（普通話）以外に、いくつかの少数民族言語でも同内容で実施される。したがって、高校のⅠ類で学んできたことは彝語版の高考に対応している。Ⅰ類は彝族の学生にとって、母語で高考を受けられるためにより良い点数を出せるのが魅力となる。このために中学まではⅡ類で学んできた学生が高校からⅠ類に変更することも多い。ただし、Ⅰ類学生向けの彝語版高考は、主に四川省内の高等教育機関で通用し、四川省外の学校を希望する場合は省が個別に学校と協議をすることになる。現在のところ、陝西師範大学などいくつ

かの大学には入学実績があるという。両類模式制度がスタートした1993年に小学校に入学した学生が高校まで進学し、彝語高考に参加したのは2005年のことである[x]。この「1期生」の誕生をもって制度はひとまずの完成をみた。行ってきた漢語の学習自体は高考に関わらないことになるが、少なくとも直接教授法で行ってきた訓練自体は、実用に即したオーラルの能力を保障する。結局どの分野に進むにしても漢語を話す必要はあるからだ。

またⅡ類は漢語での高考に対応する。希望すれば彝語（読み書き）の追加試験（100満点）を受験することができ、漢語の高考の点数に彝語の追加試験の得点を加えた成績で選抜する大学もある。漢語の高考の点数だけで余裕を持って重点大学に進学できるほどの学生ならともかく、中の上くらいの成績の学生にとっては、彝語の追加試験を加算した成績で選抜を受けられるということは、それだけ大学に入学するチャンスが増えることになる。母語でない言語で高考を受けることは、漢族の学生などに比べてデメリットとなり得るため、そこは「少数民族の非母語による受験」ということで、点数が加算されるというアファーマティヴ・アクションが用意されているわけだ。漢族学生の大多数にとって彝語自体は高考に関わらないが、Ⅰ類における漢語同様、割り当てられた大量の授業時間で聞き取りの訓練を積み重ねてきたことの意味は大きく、涼山彝族自治州で彝族と接触するのに必要な最低限の能力は身につけたことになる。また彝族の学生にとっては、漢語の高考に集中して自らの民族言語を疎かにすることを防ぐ役目も果たす。このように両類模式は、学生がⅠ類とⅡ類のどちらを選んでも損の無いように設計されているのである。

4．大学における複言語教育

次に大学教育の状況について述べたいと思う。涼山彝族自治州には「西昌学院」という公立大学があり（「学院」は中国語で College を意味する）、ここに「彝語言文化学院」という彝語専攻の学部が設置されているようだが、今回の調査では取材できなかった。ただ、優秀な学生はよりレベルが高い、四川省の省都・成都にある西南民族大学に行く傾向にあるという。

成都は漢族の都市で、涼山彝族自治州からは地理的にも文化的にも遠く離れており、ヨーロッパであれば「外国」となっていてもおかしくない距離にある。しかし西南民族大学は、省都の大学であるために、省内少数民族のエリート養成の拠点となっている。自治州の家庭からすれば、「高考」を勝ち抜いた子どもを「首都」へ「留学」に送り出したような気持ちなのだろう。西南民族大学では授業見学を含む詳細な調査を実施することができたので、以下にその報告を行っていきたいと思う。

西南民族大学の前身は1951年に開学した西南民族学院で、2003年の改組で現在の名称に改められた。開学当初は少数民族居住区に派遣される漢族エリートに少数民族の言語を教えることが主な役割だったというが、現在では中国のすべての少数民族の学生に開かれた高等教育機

関と位置づけられている。実際、芸術学部には40以上の民族の学生が在籍しているということだったが、独立した学部を持っている少数民族は四川省内で最も人口の多いチベット族と彝族の２つだけである。

そのうちの１つである彝学学部（中国語では「彝学学院」。この場合の「学院」は、University の中に設置された学部を指す）は、西南民族学院時代の言語学科（中国語では「語文系」）彝語専攻に由来する。1984年に言語学科からチベット語専攻とともに分離して少数民族言語文学学科（中国語では「少数民族言語文学系」）となり、さらに1992年にチベット語専攻と分かれて彝言語文学学科（中国語では「彝言語文学系」）として独立し、最終的に2003年の大学への改組の際に学部に昇格した。現在、彝学学部は１学年160名ほどの在籍者がいる。大学は成都市郊外の成都双流国際空港に隣接する広大な航空港キャンパス（双流校区・新校区）と、成都市内にある武侯キャンパス（老校区）とに分かれるが[xi]、彝学学部の学生は１・２年次を前者で、また３・４年次を後者で過ごす。学部の彝族学生はほとんどが涼山彝族自治州を中心とした四川省の彝族居住区の出身で、一部チベット自治区から来ている者もいるが、雲南省や貴州省など、他の省の彝族は訪問時点では一人もいなかった。

後述するように現在の彝学学部では英語などの外国語教育にも力を入れているが、1970年代までは開学の目的である少数民族言語の教授に特化し、英語は入学のための高考の受験科目として要求されていなかった。これは、省内の少数民族居住地域では中学・高校の英語の教員が不足していたことも理由として挙げられよう。しかし1980年代半ばから英語が受験科目に加わり、さらに2000年以降はもともとあった彝語・漢語専攻に加えて彝語・英語専攻が、さらに2008年には彝語・日本語専攻が開設された。彝語・英語にしても彝語・日本語にしても、さらに漢語も勉強することには変わりはなく、学部はここで一気に多言語教育へと舵を切ったのである。なお今後は彝語・ビルマ語専攻や、彝族の伝統医学を学ぶ彝薬学専攻も開設することが計画されている。

彝学学部の語学の授業は１・２年次に重点的に配分されている。入学直後に、彝語・漢語専攻は彝語の、彝語・英語専攻は英語の能力テストを実施しているが、プレースメントテストのような厳密なものではなく、教学上の調整のため空き時間を利用して行うものということだった。また彝語・日本語専攻は、学生のほとんどが日本語を初級から始めるため、能力テストは実施していない。

彝語・英語専攻では、英語が１年次に週13コマ、２年次に週14コマ、漢語が１・２年次に週４コマずつ配当されている（なお、西南民族大学の１コマは45分である）。３年次には英漢翻訳の授業が週２コマあるが、漢語や彝語単独の必修授業は無い。また彝語・日本語専攻では、１・２年次に日本語が週12コマ（うち週２コマは日本人教員の授業）、漢語が週４コマ配当され、３年次には読み書きを中心とした日本語授業が週４コマ配当され、漢語や彝語の必修授業

は無い。また彝語については、彝語・英語専攻、彝語・日本語専攻ともに、１年次に週４コマ配当されている。

上記のカリキュラムから、彝語・英語専攻、彝語・日本語専攻はいずれも、１・２年次で３つの語種を集中的に学ぶ体制となっていることが解る。２コマ分でほぼ日本の大学の１コマに相当することから計算してみると、学生たちがいかに多くの時間を言語の学習に費やしているかが解ると思う。調査時に行ったヒアリングでは、こうした言語学習が非常に大きな負担だとする声が学生からも教員からも聞かれたが、一方で複数の言語を集中的に学ぶことで、それぞれの言語どうしの類似点や相違点などに気づく機会にも恵まれているようにも思われる。

調査では実際の授業をいくつか見学することもできた。以下、言語ごとに列挙し、それぞれ最後に考察を加える。

（１）英語の授業

「基礎英語」。官雪梅（漢族、女性）が担当。彝語・英語専攻１年次設置科目、学生約45名。テキストは『新編英語教程』で、PowerPoint を使って進行する。漢語・彝語は一切話さず、英語のみで行う。担当教員が感情を込めて速いテンポで英語を話し、授業全体がかなりの緊張感を持っており、全体的に高いレベルの授業を展開しているという印象を持った。ただ、一部の学生は必ずしも言われていることの全てを理解しているわけではないようで、教員の質問に対して周りと相談して答えるというような姿も見られた。

「英漢筆訳」。黄睿（漢族、女性）が担当。彝語・英語専攻２年生設置科目、学生約30名。PowerPoint を使って進行する、英語の文章を訳す授業。文法や語彙などについて英語・漢語それぞれの言語の特徴を捉えながら読解を行う。したがって使用言語は漢語になり、彝族の学生にとっては母語以外の言語間の翻訳ということになる。

個々の授業の内容については、もちろん教員の個性によっても左右されるが、カリキュラムからは、１年次に聞き取りや会話の能力を徹底的に強化し、２年次以降に読み書きの能力を向上させようという方向性を感じた。

（２）日本語の授業

「日語写作」。趙蕤（漢族、女性）が担当。「日語」は日本語、また「写作」はライティングを意味する。彝語・日本語専攻３年次設置科目、学生約20名。担当教員は大学で日本語を学び、中国沿海部の日本企業で働いていた経験も持つ。授業は彝語を一切使わず、漢語で行われる。テキストには日本語作文の教科書と大学院試験の日本語の過去問を用いるということで、見学した際は動詞の時制について漢語と日本語の対照がテーマだった。ただ初回授業ということで、前半はガイダンスも行われていた。担当教員にインタビューを行ったところ、多くの学生は地

元での公務員採用を志向し、日本語をマスターしようというインセンティブに欠けるという話をされた。ただ、大学院を受験する少数の学生は、英語は地元での教育が不十分で漢族の学生に敵わないため、大学から学習を始める日本語が得点源になり得るという理由で取り組むことが多いという。ガイダンスでは、この点を強調して学生に動機付けをしようという努力も見られた。

現在、彝学学部での日本語担当教員はほとんどが彝語を解さない漢族で、授業も漢語で行われている。彝語・日本語専攻を設置した大学側の意図は、１つには次世代の彝族の日本語教員を養成することにある。彝語と日本語は発音や文法が似ているということもあり、漢語を介さず母語である彝語で直接日本語を学ぶことの意義は大きいからである[xii]。また、彝語・日本語専攻設置のもう１つの意図は、漢族を飛び越えて直接日本と関わり、世界へ羽ばたく人材を養成しようという点にあるが、多くの彝族学生は国外に出るより郷里の涼山彝族自治州で公務員になることを望み、少数のやる気のある学生は専門大学院進学のための手段として捉えていることが多い。実際、インタビューを行った３年生の学生の一人も、４年次に独学で準備をして日本語検定1級を取り、大学院受験に日本語を使うつもりだと述べていた。

ただ、彝族の多くが日本に対して期待と親近感を抱いているのも事実である。調査中も複数の方から、かつて長江下流域にいた原民族が、一方は西に行って彝族となり、もう一方は東に行って日本人になったという、「彝日同祖説」のようなものを聞かされた。これは歴史的事実と言うより、長く漢族と渡り合ってきた彝族が、同じく中華文明の周辺に位置し、また「稲の道」でも繋がっている日本人に対して有している、ある種の感情の表明であろう。こうした日本への親近感が日本語学習に結びつけば、将来的にこの問題は大きく改善するように思われる。

（３）漢語の授業

「現代漢語」。依烏（彝族、女性）が担当。彝語・英語専攻１年次設置科目、学生約45名。テキストは『現代漢語』で、PowerPoint を用いる。漢語の会話・読解ではなく、漢語を言語学的に分析し、新語・多義語・同音語・同義語などについて解説するというもの。教員は彝語もできるが、授業は漢語のみで行われていた。

彝族の中には漢語のレベルアップが必要な学生もいるとはいえ、全般的に簡単に過ぎるような印象も持ったが、高校までであればともかく、大学における漢語の授業というのはなかなか位置づけが難しいのかも知れない。

（４）彝語・彝学の授業

「彝族畢摩文化」。羅慶春（彝族、男性）が担当。彝語・漢語専攻２年次設置科目だが、他専攻からの選択履修者も多い。学生約40名。テキストは『涼山畢摩』。畢摩は前述のピモの漢字

表記。PowerPoint で写真を見せ、その背景となっている彝族の歴史・伝統・文化を解説する。使用言語は漢語（四川方言を含む）６割、彝語４割といった印象で、特定の名詞は彝語を使用し、重要な部分は同じ内容を漢語と彝語で２回説明する。授業中、漢語に反応する学生と彝語に反応する学生が存在したのは興味深い。担当教員は、彝族は自らの文化を知り、それを母語で説明できる能力を持つべきだと主張しつつ、同時にまた知識分子は漢語もできなければならないと述べ、漢語でも説明を行うのは決して母語の代わりに用いているわけではないと強調。非常に熱のこもった授業で、学生の反応も良い。

「彝族爾比克智」。打西阿且（彝族、女性）が担当。彝語・日本語専攻２年次設置科目。学生17名。テキストには彝語で書かれたプリントを配付。「爾比克智」とは具体的な事物を例に挙げることわざ・格言のようなもので、リズム・アクセント・押韻に特徴があり、彝族の民間文学に属する。見学した際は、人としてのあり方を述べたようなやや哲学的な内容の文章が題材で、クラス全員で彝語で音読したあと、教員が漢語（四川方言を含む）と彝語で二重に解説していた。担当教員にインタビューを行ったところ、漢語での説明も加えているのは教材の彝語が読みこなせない学生も少数存在するためということだった。

いずれの講義も、彝語そのものの授業というよりは、どちらかというと彝族の文化に関わる授業となっている。「彝語学部」ではなく「彝学学部」を名乗るだけのことはあるが、内容が充実していて非常に面白く、彝語の学習自体もこうした文化理解無しにはあり得ないことを実感した。なお、学生は半期ごとの長期休暇の帰省時に、地元で調査を行って彝語でレポートを作成することが義務づけられており、これによって自分から彝族文化を研究しようという姿勢を養うとともに、彝語の作文能力を高めさせることも行っているそうである。またどちらの授業も漢語と彝語の２言語が用いられており、授業そのものが教員が学生に求めている複言語能力の実践となっていると言えるだろう。

以上、西南民族大学で見学した授業について述べてきた。前章で検討した小中高の言語教育もそうだが、どの言語についても、まずは聞く・話すという能力を高め、それから読む・書く能力を養成するという設計がなされていることが伺える。なお３年次になると、漢語や彝語の単独の必修科目はなくなるが、文学・哲学・文化論など、漢語や彝語を高度に運用する科目が設置されている。また４年次では必修の授業はほとんどなく、全体の授業数も少ないという。

日本語の授業の部分でも触れたが、学生の８割は卒業後に涼山彝族自治州に戻って多くが公務員（基層幹部）となり、また残りの２割が出身地以外の場所で就職するか、あるいは大学院に進学するという。公務員志望も、地方の民族エリート養成という観点から言えば成功と言えると思うが、インタビューを行った担当教員は、地元に閉じ籠もらずに外地や海外に出て活躍する知的エリートが生まれることの方に期待を寄せているようである。それは、大学院受験科

目などとは関係ないビルマ語を学ぶ彝語・ビルマ語専攻を設置しようとしていることからも推測される。

5．おわりに

中華人民共和国の少数民族政策は、旧ソ連で行われたコレニザーツィヤをモデルとしている[xiii]。これは日本語では一般に「土着化政策」と翻訳され、旧ロシア帝国の支配下で抑圧されていた様々な非ロシア民族について、固有の言語の使用と自治を保障するというもので、おおむね1923年頃から開始された[xiv]。ただ、ドイツ人やユダヤ人、ウクライナ人、ベラルーシ人など、ソ連領域内の「西方民族」については区分が初めから明確だったが、不明瞭な部分が多い「東方民族」は、先にそれぞれの民族の「線引き」を行う必要が生じた[xv]。その際に用いられたのが、スターリンが1913年に発表した「マルクス主義と民族問題」という論文の中に現れる、「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である」という定義である[xvi]。その結果ソ連領内には100を越える民族と言語が確定されたが、ドイツ人・ユダヤ人・ウクライナ人など、民族区分がかなりはっきりしているロシア西方と同様の基準で北アジアや中央アジアの人々を考えたために、中には実情から離れた「切り分け」が行われ、人工的に「作られてしまった」民族も多数存在することが指摘されている[xvii]。

またコレニザーツィヤでは、東方民族の多くが「文化的後進」状態にあるとされ、大学入学など教育面で優遇措置を保障するアファーマティヴ・アクションが設定された。ただ民族言語の地位については時期によって何度か修正がなされている。例えば1920年代の段階では諸言語の平等がうたわれ、「国家の共通語」は制定しないとされていたのにもかかわらず、その後は急進的なロシア化が進み、諸言語の中での「ロシア語の主導的地位」が認められている[xviii]。

中国が国家建設のためにソ連の言語政策を移植したのは1950年代前半のことで、そのためそこで参照されたのもその当時のソ連のあり方だったことは注意しなければならない。それまで「国語」と呼ばれていた漢族の共通語が「普通話」、すなわち「国内のすべての場所で普く通じる言語」と名を変え、諸民族全体の共通語となったのも、また中国を「多民族国家」と規定して漢民族を「主民族」、その他の諸民族を「少数民族」としたのも、いずれも1950年代前半の時点でソ連に存在していた様々な言語政策の中国的展開であった。

また、スターリンの定義を用いた民族の区分け作業も、「民族識別工作」という名で実行された[xix]。彝族という民族が「確定」したのもこの時であるが、アメリカの人類学者スティーヴァン・ハレルは、この時に彝族という単一の民族として認定した四川省・雲南省・貴州省のそれぞれのグループは、おたがい口語での意思疎通ができないほどに分かれ、また書写伝統も異なっていた上に、同族意識も持っていなかったことを考えると、本来別々の民族として扱われ

るべきであったと述べている[xx]。

実際今回の調査でも、四川省涼山彝族自治州で作られた規範彝文や、それをもとにした両類模式は、書写伝統の相違などを理由に雲南省や貴州省の彝族には採用されていないし、また彝族エリートの養成を行う西南民族大学彝学学部にも、他省からの学生は来ていないことが確認された。本報告で述べてきた政策や教育は、四川省涼山彝族自治州の彝族の中だけに留まっているのである。

確かに民族識別工作における彝族の認定範囲について疑問が無いわけではない。そもそも彝族という名称自体、漢族がかつてかれらを「夷」と呼んでいたのを、同音で見栄えのする「彝」という漢字に変えたものである。「夷」は、日本語の訓読みで「えびす」となることから解るように、「異民族」に対するやや侮蔑的な呼び名である。涼山の彝族はもともと自分たちのことを「ノス」と呼んでいたが、これをそのまま使って「ノス族」としなかったのは、雲南省や貴州省のグループが自らのことをそれぞれ「サニ」「ロロ」「リポ」「ナス」「アシ」などと呼んでいたため、全体を統括する別の名称が必要になったからだ。

また四川省・雲南省・貴州省のグループをまとめたのは、民族識別工作の際に言語や文化が同系統と判断されたためで、それは相応の説得力も有しているのだが、言語をどこまで「同じ」とするのかはある程度の恣意性もある。例えば彝語と同じくチベット・ビルマ語派彝語支に属するとされたリス語・ジーヌオ語・ハニ語・ラフ語・ナシ語などを話す諸民族についても、判断基準を少し大きく取れば「同じ」と言えなくもなく、その場合彝族は逆に現在よりももっと規模の大きい民族となっていたことになる[xxi]。

ただ実際には彝族は現在の範囲ですでに確定されてしまっている。当事者たちにとってみれば、ある日突然為政者である漢族から、自称はともあれ今後は彝族を名乗るように言われ、しかも今まで別に仲間だと思っていなかった隣の省の人々も同族だと言い渡されたという感じだったろう。その点で、「彝族という民族」やその「伝統」と言われるものは、20世紀の後半になって新たに「作られた」枠組ということになる。涼山彝族自治州の彝語教科書が依拠する1980年の「彝文規範方案」は、従来の表記を整理したものであると述べたが、実はその際に、もともと表意文字だったロロ文字を表音文字に改めた上、横に寝ていた字形を縦にするというかなりドラスティックな変更を加えている。いわばここで新しい文字体系が創り出されたのに等しいが、これなどは彝族文化というものの性質を考えるのに象徴的な存在といえるだろう。しかし、過去の政策について異議を唱えたところでいまさら変更できる状況にはなく、もはや現在の枠組で進んでいくしかない以上、例えば涼山彝族自治州の言語政策が州内でしか通用しないなら、それはそれで動かしていけば良いだけである。1980年の「彝文規範方案」によって作られた涼山の彝族の「伝統」は、これに則った教育制度が軌道に乗ることで、今や「完成」を見たと言うことができるだろう。

なお、1950年代にソ連から中国に導入された政策の多くは、本国ではその後スターリン批判とともに否定された。コレニザーツィヤや少数民族に対するアファーマティヴ・アクションもそのひとつであるが、中国では1950年代末に中ソ蜜月が終了したことで、かえって当時のソ連の枠組みが残された上、さらに中国独自の発展も遂げた。彝語教育の高考への接続は、その典型例として捉えることができるだろう。

ただそれは同時に、両類模式が欧米や日本などとは異なる環境に適応して独自の進化を遂げた制度であることも意味している。欧米の少数言語使用地域では、実生活の上での実用性や、多言語環境の認識といった問題が重視され、例えば幼稚園や小学校などの早期教育では複言語への「気づき」といった課題が設定されている。また教学方法も、旧時代的な読解練習やスクールグラマーの暗記ではなく、さまざまに工夫を凝らした教材を開発し、実践していくことが好まれているようである。これに対し、民族戸籍と高考制度を背景とした彝族の複言語教育は質の異なる存在であり、また文章読解を中心とした直接教授法というあり方は、考え方によってはやや時代錯誤のような印象を受けるかも知れない。

しかし一方で、こうしたバックグランドの異なる世界で発達した言語教育のあり方を見ることは、我々にとって刺激となる要素を多分に含んでいることも確かである。例えば、我々は彝族のような民族の生き残りのためにはどのような人材を養成するべきかという観点から、小学校から大学までの言語教育を統一的に設計するとか、その中で学生の実情に合わせてフレキシブルに対応できる制度を策定するといった発想に欠けている。直接教授法についても再評価できる面はあるだろうし、言語と文化教育、あるいは一般教科との関係といった問題にも、もっと注意が払われて然るべきだろう。そうした点で、彝族から我々が学ぶべきことは少なくないと思われる。

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「外国語一貫教育における複言語・複文化能力育成に関する研究」（2012年度～2014年度、基盤研究（A）、研究課題番号：24242018、研究代表者：境一三）による成果の一部である。

なお調査にあたっては、西南民族大学の羅慶春（彝語名アクウウ）氏に全面的な協力をいただいた。ここに記して感謝を申し上げる。

注

[i] http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/renkoupucha/2000pucha/html/t0201.htm（中国国家統計局 Web サイト、2014年９月10日閲覧）

[ii] 朝克・李雲兵等著『中国民族語言文字研究史論』（中国社会科学出版社、2013年）、第二巻南方巻（上）220頁および357頁。

[iii] 1955年に全国文字改革会議と現代漢語規範問題学術会議で決定された定義。なお北方話とは、北京を含む中国北方の漢語方言を指す。

[iv] 菊池秀明「一九世紀前半の四川涼山彝族地区における民族関係とその影響――台湾故宮博物院所蔵の檔案史料を中心とする分析」、『中国の民族表象　南部諸地域の人類学・歴史学的研究』（長谷川清・塚田誠之編、風響社、2005年）、57頁−92頁。

[v] 前出『中国民族語言文字研究史論』、第二巻南方巻（上）195頁−196頁。

[vi] 「涼山州双語教学情況」（内部資料、2014年）、２頁−３頁。

[vii] 福田和展『涼山彝族の言語と文字』（三重大学出版会、2011年）、55頁−61頁。

[viii] ただ、PC で用いる彝語の入力システムはこの「涼山彝族拼音文字修訂方案」に基づくローマ字が採用されているため、一方でこれを勉強することは必要であると説く教員もいた。この点は日本語入力におけるローマ字の使用の問題と類似しているものと思われる。

[ix] 前出「涼山州双語教学情況」、２頁−３頁。

[x] 前出「涼山州双語教学情況」、５頁。

[xi] なお西南民族大学はこの２つのキャンパス以外に、成人教育部門専用のキャンパスや附属教育機関のキャンパスもある。

[xii] 発音面においては、例えば彝語は破裂音に無声無気音・無声帯気音・有声音の三項対立が存在するため、普通話や多くの漢語方言に無い、日本語で一般に濁音と称される有声子音を持っていることなどが挙げられる。また文法面では、漢語と異なり目的語の後に動詞が来る上、日本語の助詞に似た後置詞を用いるため、語順が非常に似通ったものとなる。陳士林・辺仕明・李秀清編著『彝語簡志（中国少数民族語言簡志叢書）』（民族出版社、1985年）を参照。

[xiii] なおソ連の言語政策の中国への移植は大きな研究課題であり、本稿はこれについて専門的に解明する立場にはない。これについては、黄光学・施聯朱主編『中国的民族識別――56個民族的来歴』（民族出版社、2005年）、118頁−133頁を参照されたい。

[xiv] 荒井幸康「ソヴィエトにおける言語の「土着化」政策に関して――カルムイク、ブリヤートにおける事例を中心に――」、『一橋研究』第29巻１号、2004年、79頁−90頁。また福田誠治「ソビエト、ロシアにおける民族と言語問題（6）―民族理論の初期の実践（4）―」、『都留文科大学研究紀要』第57集、2002年、63頁−83頁。

[xv] テリー・マーチン著、半谷史郎監修、荒井幸康・渋谷謙次郎・地田徹朗・吉村貴之訳『アファーマティヴ・アクションの帝国　ソ連の民族とナショナリズム、1923年〜1939年』（明石書店、2011年）、84頁−85頁。

[xvi] 田中克彦、『「スターリン言語学」精読』（岩波書店、2000年）、48頁。

[xvii] 佐々木史郎「『民族』解体：シベリア・ロシア極東先住民の文化・社会研究の枠組みに関する理論的

考察」、『民族の共存を求めて (3)』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告集 No.52、北海道大学スラブ研究センター、1998年、64−117頁。

[xviii] 前出『アファーマティヴ・アクションの帝国　ソ連の民族とナショナリズム、1923年〜1939年』、518頁−520頁。

[xix] 以下、1950年代の中国における民族識別工作、およびそこでの彝族の認定については、前出『中国的民族識別——56個民族的来歴』、19頁−25頁および163頁−167頁。

[xx] 斯蒂文・郝瑞（Setevan Harrell）著、巴莫阿依・曲木鐵西共訳『田野中的族群関係与民族認同：中国西南彝族社区考察研究（Field Studies of Ethnic Identity : Yi Communities of Southwest China)』、広西人民出版社、2000年。また樊秀麗「大凉山彝族における民族表象と宗教儀礼——動態的帰属集団表象の観点から」、前出『中国の民族表象　南部諸地域の人類学・歴史学的研究』、207頁−233頁。

[xxi] 実際、中国の著名な人類学者である費孝通も、これを「彝語系統の民族」として一括りの民族集団として捉えている。費孝通編著、西澤治彦・塚田誠之・曽士才・菊池秀明・吉開将人共訳『中華民族の多元一体構造』（風響社、2008年）、47頁。